

聖書：ヨハネの黙示録 11：15～19

説教題：主は世々限りなく支配される

日時：2021年4月25日（朝拝）

いよいよ第7のラッパの場面になります。先に見た7つの封印の幻と同様、7つのラッパの幻も、第1から第7の幻までで主の復活から世の終わりまでの全期間を描くものとなっています。そして第7の場面はいずれの幻でも世界の歴史の最後の日、キリストの再臨の日を描くものです。その日に起こることとしてここで言われていることは何でしょうか。15節に「第七の御使いがラッパを吹いた。すると大きな声が天に起こって、こう言った」とあります。「この世の王国は、私たちの主と、そのキリストのものとなった。主は世々限りなく支配される。」この言葉はどこかで見たり聞いたりしたことがあると思う方もいらっしゃるのではないのでしょうか。これはヘンデルのオラトリオ、メサイアの中の第2部最終曲、通称「ハレルヤコーラス」の真ん中の部分以降で何度も出てくるフレーズのもとになっている言葉です。日本語の歌詞では、その部分はこう歌われます。「世の国民今やわれらの主に帰するにおよべり。とわに主おさめたまわん。」日本語では今一步、今日の黙示録のことばが忠実には訳されていませんが、英語の歌詞ではほとんどそのままが歌詞となっています（The Kingdom of this world is become the Kingdom of our Lord and of His Christ, and of His Christ. And He shall reign for ever and ever.）

まずここで「この世の王国は私たちの主なる神とキリストのものになった」と歌われています。ということは、この最後の日まではそうでなかったということです。もちろんこの世界は神が造った世界であって、そういう意味では最初から最後まで神のものです。しかし人間は創世記3章で罪を犯して自らサタンの支配下に入ってしまった。この世はサタンの支配下にあると聖書は語っています。そのサタンのもとにある人間は神に敵対しています。聖書が言う「この世」とは神に逆らい、神に敵対するこの世界の総体を指します。この世界は神を認めず、むしろ神を退け、神などいないと言い、あるいは他のものを神として生活しています。この世界は神とキリストの王国と呼ばれる状態にありません。実際、前回読んだ11章1～14節では、神とキリストを証しする教会が死の状態に至る日が来ると言われました。世の人々はそれを見て喜び祝う。神とキリストを宣べ伝えるうるさい声が聞こえなくなってせいせいしたと互いに贈り物を交わす。そしてその死んだ状態を放置し、ただ

眺めていると。ところが3日半の後、まさかの復活が起こり、主を信じる者たちは天に上げられます。その様子を人々は見て恐怖に襲われます。そして大きな地震が起こって都の1/10が倒れる等々まさにこの世の終わり直前の様子が記されました。それに続くのが今日の箇所です。最後の第7のラッパが吹かれて天に大きな声が起こり、こう賛美されます。ついにこの世の王国は主とそのキリストのものになった！と。ここで「主」と言われているのは、その後でキリストが「そのキリスト」と言われていることからすると父なる神を指すと考えられます。神は十字架と復活を経て天に昇らせたキリストを世界の王座に就かせました(5章7節)。その日以来、最後の日まではキリストがこの世界を支配します。Iコリント15章24節以降を見ると「キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし」「すべての敵をその足の下に置くまで」王として治めると言われています。そして最終的な完成へと至らせた後、その王国を父である神に渡されるとあります。まさにその日の光景がここに描かれていることなのでしょう。今、私たちの目に見える人間の国、この世の国がいかにも力強くても、最後にそれは神とキリストの完全な支配に取って代わられる。神の御心が完全に行われる国、主の御国が現れる。そして主は世々限りなく支配される。ハレルヤコーラスで「とわに主おさめたまわん」あるいは英語の「He shall reign for ever and ever」というフレーズが何度も歌われるように、とこしえにこの支配は続きます。こうして「御国を来たせたまえ」という私たちが祈る主の祈りは必ず成就することに至ります。その祈りは決してむなしく終わらないのです。

さて大きな声に続いて、神の御前で自分たちの座に着いていた24人の長老たちの賛美が16節以降に記されます。彼らはひれ伏して神を礼拝してこう言います。17節：「私たちはあなたに感謝します。今おられ、昔おられた全能者、神である主よ。あなたは偉大な力を働かせて、王となられました。」これまで神のことが「今おられ、昔おられ、やがて来られる方」と1章4節、8節などで言われていました。しかしここでは3つ目の「やがて来られる方」というフレーズがありません。それはお分かりのように、「やがて来られる」と言われたその時が、ここに到来したからです。ですからこの箇所は歴史の最後の日のことであることが分かります。ここからもヨハネの黙示録は歴史的・時間的順序で書かれているのではないことははっきり分かります。ある人は、まだ黙示録は半分くらいまでしか読んでいないから、ここは最後の日のことではないと考えますが、これまで繰り返し述べて来ましたように、黙示録は主の復活から再臨の日までを繰り返し様々なアングルから描いています。

ですからここはこの世界の歴史の最後の日、主の再臨の日について述べている部分です。17 節後半に「あなたは偉大な力を働かせて、王とられました。」とありますが、これは敵対する者たちに打ち勝って永遠に治める王になられたということを言っているものです。

その王によるさばきが 18 節で述べられています。まず「諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りが来ました」とあります。最初の「諸国の民は怒った」とは、この世の国の人々が神に敵対し、逆らい続けて来たことを指しています。詩篇 2 篇 1～2 節：「なぜ国々は騒ぎ立ち、もろもろの国民は空しいことを企むのか。なぜ地の王たちは立ち構え、君主たちは相ともに集まるのか。主と主に油注がれた者に対して。」この後も黙示録 16 章 9 節、11 節を見ると、罪あるこの世に神が下すさばきに接して、人々は悔い改めるどころか、「これらの災害を支配する権威を持つ神の御名を冒瀆した」とか、「その苦しみのゆえに天の神を冒瀆した」と出て来ます。そのように神に対して怒る諸国の民に、逆に神の怒りが下されます。次に「死者がさばかれる時」とあります。後の 20 章 12～13 節にもう少し詳しく書かれますが、そこで明らかにされるように、死んだ人もやがて復活させられた上でさばきを受けます。死んだら終わりではありません。死者がよみがえらせられ、さばかれます。ですからここはいわゆる最後のさばきを描いているものです。

真ん中を飛ばして 18 節最後に「地を滅ぼす者たちが滅ぼされる時です」と言われています。これも神に逆らい、神の民を迫害する人たちを指す言葉です。先に怒った者に神の怒りが来ると言われたのと同様、ここでも滅ぼす者たちが滅ぼされると言われています。つまり自分たちがした通りにされるという原則です。詩篇 7 篇 16 節：「その害悪は自分の頭上に戻り、その暴虐は自分の脳天に下ります。」

そんな中、良い意味での報いを受ける人たちもいることが 18 節の真ん中にあります。そこに「あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、御名を恐れる者たち、小さい者にも大きい者にも、云々」とありますが、これらは神の民を表しています。その人たちに「報いが与えられる時」とあります。どんな報いなのでしょう。ある人はこの前後に敵に対する神のさばきが語られ、それらにサンドイッチのように挟まれて神の民の報いのことが語られているから、その報いとはまず敵の上にさばきが下されることそのものを指しているのだろうと言います。6 章 9～11 節では殉教

者たちの祈りが記されていました。「聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」　しかしついにこの日が到来し、悪と悪を行う者の上に厳正なさばきが下されることによって神の民は報われるということです。神に望みを置き、神を信じて従って来た彼らはこのような形で報いを受けるのです。そしてもちろん報いはそれだけではなく、より積極的にどんな報いを受けるのがこの後の黙示録の中に描かれて行きます。

最後 19 節では「天にある神の神殿が開かれ、神の契約の箱が神殿の中に見えた」とあります。ご存知の通り、契約の箱は神殿の一番奥の部屋、至聖所と呼ばれる部屋に安置され、誰も直接見ることは許されないものでした。大祭司が民の贖いをするために年に一度、入って行くことのできる部屋でした。しかしバビロン捕囚の際、神殿が破壊されたこととセットで、この神の契約の箱は失われてしまい、その後神殿は再建されても、契約の箱はないままでした。なのにその契約の箱が天の神殿の中に見えた！と言います。これは持ち去られた契約の箱がそこに移されていたということでしょうか。そういう意味ではないと思います。確かに地上の神殿における契約の箱は失われました。だからと言って、その実質もなくなったというわけではない。天に実質はある。それを幻の中で象徴としてヨハネは見させられたのです。この出来事は何を意味するのでしょうか。

まず前後関係に目を留めることは大切だと思います。直前では神に逆らう世へのさばきが語られました。そしてこの契約の箱への言及の後、19 節後半に「すると」と始まって「稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、地震が起こり、大粒の雹が降った」とあります。これらはいずれも神のさばきを象徴するものです。先に見た 7 つの封印の幻の第 7 の場面、すなわち最後のさばきの場面にも、8 章 5 節で「すると、雷鳴と声のとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった」とありました。ですから 19 節後半も同じさばきを描いていると考えられます。このラッパのさばきとセットで思われるのは、あのエリコの行進のことです。この 7 つのラッパの幻は、あのエリコの町を攻略する際、一日一回ラッパを吹いて町の周りを回ったことと関係すると述べましたが、あの時もラッパの後ろで契約の箱を担ぐ祭司たちが行進しました。敵にとってみれば契約の箱が見えることは恐ろしいことだったでしょう。それはその箱に象徴される神がそこに現臨されることを意味します。その時のように、ここでも神の契約の箱が見えました。つまり神ご自身がお現われになった。そのことに

続いて「稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、地震が起こり、大粒の雹が降った。」 神が現れるとはそういうことです。悪に対する恐ろしいさばきが直ちに起こるのです。

しかし 18 節に神の民への祝福が含まれていたように、19 節の主の現れも、主により頼む者たちにとっては祝福の意味を持ちます。契約の箱は神の民にとっては主なる神がともにいてくださる慰めのしるしです。またこの契約の箱の上でいけにえの血が振りかけられ、罪の赦しがなされましたから、この方法により頼む者にとっては憐みも意味します。その民にとって希望の象徴である契約の箱が見えたのです！失われたと思っていたものが見えたのです！イエス様が十字架にかけられた時、神殿の奥の部屋とその前の部屋とを仕切る幕が裂け、イエス様に信頼する者は誰でも恐れることなく神に近づけるようになったことが示されていましたが、ここでもそうです。本来一番奥の部屋にあつて見えない契約の箱が、神殿が開かれて見えしました。つまり神がそのようにご自分を現してくださるということです。神はこうしてご自身の民といよいよ親しくともにいてくださる。以前にも増して、直接的に、完全に、最終的な形で、私たちの間に住み、私たちの神となってください。もっと詳しく知りたいところですが、この祝福についてはこの後もお話られますので、ここではここまでです。後の 21 章 3 節、22 節でより十分に語られることとなります。

以上の箇所から改めて思われることは、主を信じる民には苦難がありますが最後にはこのように豊かに報われるということです。真にハレルヤコーラスを歌う日が来るのです！それまでの私たちのすべての涙が拭われ、神との親しい永遠の交わりの生活がそこから始まります。私たちはこの日が必ず来ることを見つめて、神とキリストを忠実に証しし、耐え忍ぶ生活へと励まされたいと思います。そしてこの日に心からの喜びと賛美をもって、天の御国に入る者へと導かれたい。また、まだどちらの側に立つかはっきり決めていない方がいらっしゃるなら今日の箇所からも心に留めていただきたいと思います。この日が来たら、もうそれからの行き先を変えることはできません。すべての人は二つに分けられます。その日に至っていない今日はまだ恵みの時、救いの日です。ここに示された最後の日が来る前に、自らの行くべき道を考え、選び取っていただきたいと思います。そしてやがてのこの日を喜びを持って迎え、共にハレルヤコーラスの大合唱に加わり、世々限りなく支配される主の恵みと祝福に生かされる民の歩みへ導かれて行きたいと思います。